

創刊によせて

代表 辻 幸 一

愛媛県は北東から南西に向かって細長く、その特性から東予、中予および南予の3地域に分けられている。そのうち南予とは、宇和島市を中心として、その周辺の八幡浜市と西宇和郡、東宇和郡、北宇和郡、南宇和郡の各町村を含む地域をいう（大洲市と喜多郡を含む場合も多い）。南予地方は宇和海に面しており、佐田岬半島、由良半島や、日振島などの複雑な地形が続くリアス式海岸となっている。これは、瀬戸内海に面し単調な海岸の続く東・中予とは対照的である。陸部では平地が少なく、宇和海側には大きな河川がない。

交通の便の悪い地域が多く、人口もあまり多くないため、逆に自然環境には恵まれた地域である。たとえば、哺乳類については、かつては南予各地にニホンカワウソやニホンシカが生息しており、イノシシやタヌキもよく出没する。宇和海では、南から黒潮の影響を受けるため、動植物については、亜熱帯性や暖帯南部の要素が豊富である。

しかし、このように豊かな自然に恵まれた南予地方も年毎に、開発の魔の手が伸びてきている。海岸や河川はコンクリートの護岸で固められて魚は減り、海は生活排水と養殖ハマチの影響で赤潮が頻発し茶色く濁り、沼や池は埋めたてられ、山はけずられ原生林は切り倒されている。このような自然の破壊は加速度的に進行しており、動植物はどんどん減っている。

この状況を目のあたりにして、今、我々は何かをおこななければならないのではないかという衝動にかられた。そして、その方法として、現在の生物の状態を記録しておくことの重要性を感じた。それは、かつての南予の生物相を調べてみようとしても、正確な記録は少ないという状況を知ったからである。これは、交通の便が悪く調査しにくかった点もあるが、地元の研究者が少なかったためではないかと思われる。あるいは、研究者がいても、その発表の場がないため、資料が埋もれているのかもしれない。南予地方の生物の研究者が連絡を取り合え、記録を残せるような場の必要性を感じた。

私は、宇和島地方に就職して以来、生物に興味を持つ者の1人として、特に魚類の調査を続けてきた。そして、調査が進むにつれて、いかに地元の淡水や海水の魚類についてわかってないことが多いかということに気がついた。また、研究者が少ないこともわかった。そこへ、南宇和郡出身の橋越君が市内に転勤になり、生物の

研究者の会をつくりたいということで、意見が一致した。やがて、畑野君も加わり、「南予生物研究会」を作ろうという話しがまとまったのである。他地方では、私の知る範囲でも、千葉生物学会、南紀生物、沖縄生物学会などが活発に活動をしている。県内でも、まず地元の研究者で地域の生物についての知見を深めるという目的で小人数でもスタートさせようということになった。昨年11月に、若手研究者を中心に呼びかけたところ、現在13名の賛同者が得られたので、ここに「南予生物研究会」を発足させることになった。

このような経過のもとに、今、会誌として「南予生物」ができあがった。会としては、まだスタートしたばかりで、前途多難であるが、まずは第1歩をようやく踏み出したと思われる。内容にも、まだまだ未熟な点も多く、これからの研究に期待する点も多い。しかし、とにかく地域の生物に目を向け、記録を残していくことに意義があると考えている。今後、会の主旨に賛同する人を求め会員を増やしていきたいと考えている。また、先輩の先生方からの御指導や御助言もいただきたいと思う。南予生物研究会が、今後発展し、活発な活動になるように願っている。

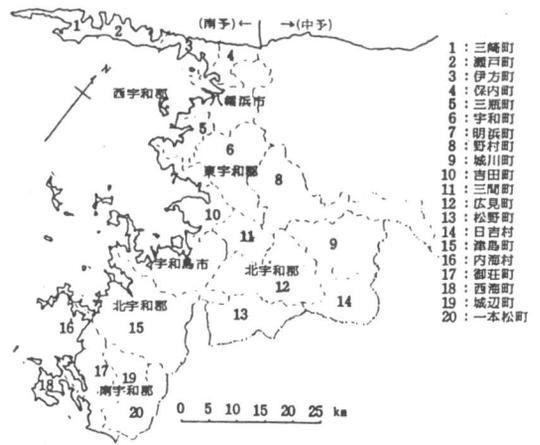


図 1 南予地方の概略図